

「如来を考察する第二十二章」

二無我を詳細に説く>有（輪廻）の継続は本性が欠如すると示す>如来が本性として有ることを否定する>

[章の著述を説く]

ここで、「有（輪廻）の継続はまさしく有る。（何故ならば）如来が存在する故である。

ここに、世尊は三無数劫あるいは七無数劫の間絶えまないさまで勤め、福德を為すことに勤め優れて投げ出すことなく、衆生に利益を成す働きのための性相を持つそれやその様々な様相によって、衆生に対して独り子を愛するよりも殊更強く、余さず護持することに勤まされる。大慈悲に突き動かされ、それやその御生誕地において、共有される地水火風や万能薬の木のように、御自身も諸衆生自身の望み通りに享受せられようと為されたことによって、長い時間をかけて一切智の境地を証得されたのである。しかし、一切智の智慧を証得された世尊御自身が、諸法（現象）の真如は如何様に留まるかを残らず御存知であり、まさしく御理解されたことによって『如来』と述べられる。

それ故に、もし有の継続が無ければ、その時如来も有るとはならず、一生でまさしく如来を証得することは量られぬ。それ故に、有の継続はまさしく有る。（何故ならば）如来が存在する故である。」と言う。

章の著述を説く>如来が自らの性相（定義）として成立したことを否定する>取得者が本性として成立したことを否定する> [如来が実質として有ることを否定する]

述べよう。彼の非常に大きな無知は、それらのような様々な様相の合理の光明が斥けようとしたが、非常に長期間慣れ親しんだので未だに斥けられず壊れない。君の、この非常に大きな無知そのものが、途切れる様相の無い輪廻の流れに入り込み、更に長く染み付かせるのである。

もしここで、「如来」という何かは本性として有るならば、その時、長い時間をかけて実現した故に有（輪廻）の継続は有るとなるが、「如来」という何かは事物の本性として認識されるのでもない。君の大きな無知の眼障によって、知恵の眼がまさしく衰えたことで、二つの月等のように誤って「如来」であると認知したのみに尽きる。

そのように如来そのものが本性として有るのではない時、その有の継続があると、何処でなろうか。

如何様に如来は本性として無いのかを示す為に、

蘊ではなく、蘊より他でもない。

それに蘊は無く、それにそれは無い。

如来は蘊を具えるものではない。

如来は如何なるものであるか。 1

と説かれ、もし、「如来」という何らかの事物が有るならば、それは蘊の本性であり、「色と、受と、想と、行と、識」という五蘊の本性か、「持戒と、禪定と、智慧と、解脱と、解脱した智慧を見る」という五蘊の本性か、その二つより別となるものであるが、前者の五蘊そのものが有情と名付けられる因であるので、この分析で取り上げるが、後者ではない。(何故ならば) これらは行き渡るものではない故と、前者の類に包含された故である。

もし五蘊より別であるならば、その如来に蘊が有るか、それらの蘊にそれ(如来)が有るか、祭祀が財宝を具えるように、その如来は蘊を具えるか?と問えば、一切の様相において分析したならば、(五蘊より別に如来は)有るのではない。

如何様にといえば、そこで先ず、蘊そのものは如来ではない。何故かといえ

ば、
「薪であるそれが、火であるならば、行為者と能作(行為の対象)が一つになる。」¹

と説かれ、「近取であるそれが、仏陀であるならば、行為者と能作(行為の対象)が一つになる。」というこれにも応用するのであり、その如く

「もし、蘊が我であるならば、生と壊を持つものになる。」²

と説かれ、「もし、蘊が仏陀であるならば、生と壊を持つものになる。」と、ここでも当てはめたまえ。そのようであれば、先ず蘊は如来ではない。

ここで、如来は諸蘊より他でもない。何故かといえ

ば、
「もし、木より火が他であるならば、木が無くとも、(火は)起こるとなる。」³

といい、その如く、

「他に相互関係したことが無い故に、燃やす因より起こらず、」⁴

「努めはまさしく無意味となる。そのようであれば、能作(行為の対象)も無い。」⁵

と説かれた如く、ここでも、「もし、近取が仏陀より他であるならば、近取無くして起こるとなる。」や、その如く「他に相互関係したことが無い故に、近く取る因より起こらず、」「努めはまさしく無意味となる。そのようであれば、能作

1 「薪…になる。」:『根本中論』第 10 章 1 偈前 2 行。

2 「もし…になる。」:『根本中論』第 18 章 1 偈前 2 行。

3 「もし…となる。」:『根本中論』第 10 章 1 偈後 2 行。

4 「他に…起こらず、」:『根本中論』第 10 章 3 偈前 2 行。

5 「努め…も無い。」:『根本中論』第 10 章 2 偈後 2 行。

(行為の対象) も無い。」と繋げたまえ。

その如く、

「もし、諸蘊より他であれば、蘊の定義が無いとなる。」⁶

という文にも当てはめたまえ。蘊等や如来に他そのものが無い故に、如来に諸蘊が有ることは不合理であり、「諸蘊に如来が有る」ということも合理ではない。

この二方向の解釈は、

「ここで我は蘊には無い。これらの蘊は、我に有るのではない。何故ならば、他性が有るならばこの考えともなろうが、その他性も無い故に、これは(単なる)考察である。」⁷

と、『入中論』で解説した。

如来は蘊を具えることも、如何様にそうではないかを、

「この我は色を具えるのではない。何故ならば、我は無い故に、具わるものと関係するのではない。別として家畜を具え、不別として色を具える。自そのものか他として我は無い。事物が無い故である。」⁸

と同論で既に説いた。

「直接には、それら五方向は、自そのものか他そのものの方向中に含まれはしようが、有身見の(対象への)向い方に相応して、五つの方向を阿闍梨が説かれた。」と知りたまえ。そのように諸蘊について五つの様相で分析したならば有るのではない、その如来であるものは、如何なる我性によって有るとなろうか。それ故に、如来は一切の様相において有るのではないとご覧になり、阿闍梨は

「如来は如何なるものであるか。」

と説かれ、『それは何も無い。』とお考えになられた。

「如来は無い故に、有(輪廻)の継続も無い。」と成立した。

取得者が本性として成立したことを否定する>蘊に依拠して名付けられたものが本性として有ることを否定する>蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する>

[蘊に依拠して名付けられたならば、本性として有るのではない]

ここである者は、「斯くも説かれた過失である背理となるので、それは『蘊で

⁶ 「もし…になる。」:『根本中論』第 18 章 1 偈後 2 行。

⁷ 「ここで…である。」:『入中論』第 6 章 142 偈。「蘊に我は有るのではない。我にも、これらの蘊は有るのではない。何故ならば、他性が有るならばこの考えにもなろうが、その他性も無い故に、それは(単なる)考察である。」

⁸ 「この我…である。」:『入中論』第 6 章 143 偈。「我は色(有形・身体)を具えると主張しない。何故ならば我は、有るのではない故に、具わるものと繋がることは無い。他として黒牛を具え、他ではなく色を具えるが、我は色より、自そのものか他そのものとして無い。」

が如来である』とも言わぬが、蘊より別でもなく、雪山に木の群れのように如来に諸蘊が有るとも言わないけれど、森中に獅子のように諸蘊に如来が有るのでもなく、転輪王が相を備えるように如来は蘊を具えるとも言わぬ。(何故ならば) 同一そのものと他そのものをまさしく承認していない故である。ならば何かといえ、蘊に依拠してそれ自体か他そのものであると述べられない如来であるものを設けるのであり、それ故に、この説は我々を批判するものではない。」という。

これに述べよう。

もし、仏陀が蘊に
依拠して、本性より有るのでなければ、
本性より無いものは、
それが他の事物より何処に有ろうか。 2

もし、自そのものか他そのものであると述べられない仏陀世尊であるものを蘊に依拠して名付けるならば、ならば「蘊に依拠して名付けられた映像のように、本性として有るのではない」となるだろう。そのように本性より一自らの本質として無く、本性より有るのではないそれが、如何様に蘊に依拠して他の事物より有るとなろうか。有るのではない自らの本質を持つ石女の子が、他の事物に相互関係して有ることは正理ではない。

蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する> [その二つが矛盾しない返答を否定する]

『仮に、斯様に映像は本性より有るのではないけれども、(鏡に向かう) 顔や鏡等の他の事物に相互関係して有るとなる如く、如来は本性より有るのではなくとも蘊に依拠して他の事物より有るとなる。』と思えば。

そう見るとしても、

他の事物に依拠してあるものは、
それが我性であるとは不合理である。
我性の無いそれが、
如何様に如来となろうか。 3

もし映像のように、他の事物に依拠して如来と名付けられるならば、そう見れば、その如来は映像のように「我性」とは不合理であり、「本性」ということ

も正理ではなく、「我性」というこの言葉は「本性」の同義語である。

「映像のように我性が無く、本性が無いそれが、如何様に如来となろうかー誤りの無い道より成仏すると如何様になろうか。」というお考えである。

蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する>

[自である事物が成立していなければ、他である事物は成立していない]

他にも、もしここで、如来に何らかの本性が有るならば、その時本性に相対して蘊の本性は他の事物となり、その他の事物に依拠して如来となるものである。しかし「如来に本性が有るのではない時、諸蘊がまさしく他であると何処でなろうか。」と示す為に説かれた。

もし、本性が有るのでなければ、
他の事物が有ると、如何様になろうか。

蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する> [然れば、如来は本性として無いと成立した]

そのように本性と他の事物が無い時、

本性と他の事物、
以外のその如来とは何であるか。 4

事物であるならば本性か他の事物となるけれど、「如来」と設けられたものは、その二つ以外の、他の如何なる事物が有ろうか。それ故に、如来は本性として無い。

蘊に依拠して名付けられたものが本性として有ることを否定する>

[如来と蘊が、取者と取られる対象として本性によって有ることを否定する]

他にも、

もし、蘊に依拠しておらず、
如来が何か有るならば、
それは、やっと依ることになり、
依拠して、それからそうなるに至る。 5

仮に『諸蘊より、そのものか、まさしく他であると言い得ない如来を、諸蘊に依拠して名付ける。』と思うならば。

それは仮に、諸蘊に依拠しておらず（蘊が）認識される以前に「如来」という何かがあり、蘊に依拠して（如来と）なった時に正しい—このように、以前に財宝より別に成立した祭祀が、財宝を得ることをするのである。

その如く、もし蘊に依拠していない如来が何か有るならば、それはここで初めて諸蘊に依拠するとなり、それらの蘊に依拠して、そうなるに至るが、一切の様相において分析したならば、

『諸蘊に依拠しておらず、
如来は何も無い。』

（何故ならば）まさしく無因である背理となる故である。

依拠していないものが有るのでなければ、
それは、如何様に近取となろうか。 6

（何故ならば）有るのではない故である。』という御考察である。そのように、僅かな蘊をも取らぬ時、「蘊に依拠して如来となる。」とは不合理である。

「その如来は近取の以前には無いので、僅かにも取らぬ時、誰によっても近く取られていないので、その近取も近取そのものとなるのではない。」と示す為に、

近く取られたのではないものは、
近取であると、何故ならないのか。

と説かれた。

「そのように、誰によっても取られていない故に、近取は近取であるとならない時、近取は無いので、近取者は何も有るのではない。」と示す為に、

近取の無い
如来は何も無い。 7

と説かれた。

取得者が本性として成立したことを否定する＞ [それらのまとめ]

それ故にそのように、斯くも説かれた論法によって、

五様相で探求したならば、
 そのものか、まさしく他として、
 無いその如来は、
 近取によって如何様に名付けられようか。 8

如来であるものを分析し探求したならば、それは諸蘊からそのもの一同一として無く、諸蘊からまさしく他一まさしく別として無い。それはそのものか、まさしく他として無いので、所依と能依（拠所と依るもの）や、それを具える方向の五様相で探求したならば無く、全く有るのではないその如来が、近取によって如何様に名付けられようか。

それ故にも、如来は本性として無い。

如来が自らの性相（定義）として成立したことを否定する＞ [取られる対象が本性として成立したことを否定する]

この分析によって、如来だけが無いのみではない。しかしながら、

近く取られるものは、
 それは本性より有るのではない。

近く取られたものである「色と受と想と行と識」という五蘊も、本性として有るのではない。（何故ならば）縁起生である故と、「蘊を考察する」において詳細に否定した故である。

もしまた、『近く取られるものは本性より有るのではないと見るとしても、因と縁の我性を持つ他の事物より有るとなる。』と思えば。

「それも不合理である」と示す為に、

我の事物より無いものは、
 それが他の事物より有ることは全くない。 9

と説かれ、我の事物より有るのではない石女の子は、他の事物によって名付けられ得るものではない。それ故に、近く取られたものも無い。

一様相としては、

「近く取られるもの、それは本性より有るのではない。」
 （何故ならば）近取者に相互関係している故と、近取者に相互関係しておらず

近取そのものが無い故に、自らの本質として成立した近取は有るのではない。

仮にもし、「近取者に相互関係していない、本性として成立した近取が有るものでなければ、ならば、そう見れば、近取者に相互関係したこととまさしく共に有ることになる。」といえば。

そう見るとしても

「我の事物より無いものは、それが他の事物より有ることは全くない。」自らの事物より成立しておらず有るのではない本性である近取が、他の事物である近取者より有ると、如何様になろうか。「それ故に、近く取られるものも無い。」という。

如来が自らの性相（定義）として成立したことを否定する＞ [その二つのまとめ]

ここで、斯くも良く証明された意味そのものを近く示す為に、

そのように、近く取られたものと近取者は、
一切の様相として空である。

と説かれ、一切の様相によって分析したならば、近く取られたものは空であり一本性が無く、近取者は欠如し、本性と離れるのである。

ここで、近く取られるものが

空であるので、空である如来を、
如何様であれば名付けるとなろうか。 10

「有るのではない近取によって、有るのではない如来を名付ける。」ということとは、あり得ない。それ故に、「諸蘊に依拠して如来と名付ける。」ということとは合理ではない。

章の著述を説く＞ [それにおいて他の邪見に関するものも礎が無いと示す]

ここで言う。「嗚呼！母への我々の望みを断った。このように、我々は食米齋仙人⁹や足目¹⁰や、耆那教徒¹¹や、伺察派¹²等、自らの妄分別によって考えた悪見

⁹食米齋仙人：古代インドバラモン教、勝論派（バイシェーシカ派）一派の教祖。残飯を食して修行をした仙人。

の非常に悪虐な細枝の網によって包まれた、解脱の都へと赴く誤りの無い道より衰えた、輪廻の荒野の非常に行き辛い道を超えておらず、善趣と浄化解脱の道を誤り無く示したとはっきり思い込んでいる者達への好意を捨て去り、他の非仏教徒の学説の闇を残らず掃われ、善趣と、浄化解脱に沿う道を誤り無く示される、非常に明らかな聖法を示す光によって全方向を残らず遍満された、様々な様相の所化の心の蓮華の集まりを開花させることに勤しまれる、事物の真如の意味が如実に留まるが如く示された器となった者達の、汚れ無い唯一の眼となった、すべての衆生の無比の守護となった、十力と無畏と、混じり気の無い仏陀の法の汚れ無い如来の太陽の曼荼羅をお持ちになる方へ帰依し、解脱を追求するのであるが、今

『そのように、近く取られたものと近取者は、一切の様相として空である。空であるので、空である如来を、如何様であれば名付けるとなろうか。』

等によって、如来は本性として無いと語ったので、我々の解脱への望みを断つたのだ。それ故に、如来の大甘露薬の樹を根元から引き抜いた君と論争してよいのだ。」

述べよう。ここで、君のような者に対して我々の望みが断たれたのだ。このように、或る君は、解脱を欲するので他の非仏教徒の学説等を捨て去り、誤り無く教示者である如来世尊へ帰依したとしても、非仏教徒の一切の言説と共通ではない、最高に深甚な、無我の獅子の声に耐えられなければ、まさしく自らの勝解が貧しいことによって、様々な悪見の蛇に絡まれた、誤った者が後続する、尽きぬ輪廻の荒野に追従する、まさしくその道より過ぎ行くのである。

如来は、何時も我や諸蘊をまさしく有るとは説かれぬ。斯くも、

「長老須菩提よ。仏陀も幻のような、夢のようなものである。長老須菩提よ。仏陀の諸法も幻のような、夢のようなものである。」

と説かれた。

我々に斯様な言葉で歪曲をされる元になった過失となる、「戲論（二元的発生）の無い如来方」がまさしく無いとは、我々は一切の様相において言わない。

10 足目：足目仙人。古代インドバラモン教、吠陀派（ベーターンタ派）の教祖。以前の名は麗仙人。シヴァ神に命じられ、シヴァ神の妻であるウマの護衛をしていた時、ウマ后は彼を誘惑しようとしたが、彼はずっと自らの足元を見続け誘惑にのらなかった。その為シヴァ神は彼をたいそう気に入り、教義を授けたと言われる。

11 耆那教徒：phyogs kyi gos can 方向の衣を持つもの。ジャイナ教聖職者は裸である為。

12 伺察派：rgyal dpog pa を教祖とする。ミーマーンサー学派。

他にも、如来は本性が無いと示し、誤りの無い意味を述べたいので、

「空である。」とも述べず、
 「空ではない。」ともしない。
 二つともと、二つともでないともせず、

これら一切は、勿論述べられる対象ではないが、しかしながら、述べられていなければ了解者達が如実に留まる本性を了解することはできない。それ故に、我々は世俗の真実に留まり世俗の意味として所化の者の面前に殊更捏造して「空である」とも言うが、「空ではない」や、「空でもあるが不空でもある」や、「空でもないが不空でもない」とも言う。まさしくそれ故に、

仮設される意味として述べよう。 11

と説かれ、世尊があるお考えによって空性等を示されたことは、「我を考察する」より理解したまえ。

斯くも経典より、

「この行く（行為）は幻のようであり、踊り子のようであり、夢のようであり、無我であり、有情は無く、命者が行くことは無く、諸法は逃げ水や水面の月のようであると、君が御存知である。空であり寂静であり無生のさまを、知らぬことによって衆生は流浪することになる。それらを、慈悲をお持ちの方が、方便の方法と、何百もの正理によって（道に）入らせる。」

等を説かれた。これら一切の分別は、戯論の無い如来がお持ちであるのではない。

如来に空性等の四つともが有られないだけではない。他にも、

恒常と無常等の四つが、
 寂滅したこれに、何処に有ろうか。
 辺と無辺等の四つが、
 寂滅したこれに、何処に有ろうか。 12

ここで世尊が、無記である十四事物¹³を示されたのである。このように、「世

¹³ 無記…事物：十四無記に当たる。非仏教徒たちが釈尊に問うた 14 の見解。釈尊が返答しなかったので「無記」と言われる。

※次頁脚注に続く

間は恒常である。」「世間は無常である。」「世間は恒常も恒常であるが、無常も無常である。」「世間は恒常でもない、無常でもない。」というものが、第一の四つ一組である。

「世間は辺（限り）を具える」「世間は辺（限り）を具えない」「世間は辺を具えるのでもあるが、辺を具えないのでもある」「世間は辺を具えるのでもない、辺を具えないのでもない」というものが第二の組である。

「如来は亡くなられて以後有る。」「如来は亡くなられて以後無い。」「如来は亡くなられて以後有るのでもあり無いのでもある。」「如来は亡くなられて以後有るのでもなく無いのでもない」というものが、第三の組である。

「その身体は命者である。その命者は身体である。」「命者も他であるが、身体も他である」というもので、これらの十四の事物は声明される対象ではないので、「無記の事物」という。

そこで斯くも説かれた論法によって、空性等の四つともが、本性が寂滅し自性が欠如する如来に、斯様に有られるのではないように、恒常と無常等の四つもそこに有られない。まさしく有られない故に、石女の子の蒙古班と白い尻のように、世間において四つともをも世尊が教証に示されなかった（無記とされた）のである。これらの四つは如来に斯様に有られぬが如く、有辺（限りが有る）と無辺（無限）等も如来には有られない。

ここに、「如来は亡くなられた以後有る。」という等の四分別も当たることが有るのではないと示す為に、

如来は有ると、
密な思い込みで捉えた者。
彼は、涅槃について、
「無い」という分別で考える。 13

と説かれ、強い固執によって「如来は有る。」という殊更に密な思い込みで捉え、妄分別が生じさせられた者は、確実に、完全に涅槃を得た如来について、如来は亡くなられて以後一亡くなられてから後時には無く、心の継続が断滅した如来を「如来は存在しないのである。」と考える。そのような考察において、見解を為したとなる。

本性が欠如する故に、如何なる場合にも如来は有るのではない、というよう

① 世間は恒常であるか・②無常であるか・③恒常無常の両方か・④両方でないか。⑤世間は限りが有るか・⑥限りが無いか・⑦限りが有る無しの両方か・⑧両方でないか。⑨如来は無余涅槃を得たのち有るか・⑩無いか・⑪有無の両方か・⑫両方でないか。⑬身体と命者（我）は同一か・⑭別か。

な者の説においては、

本性が欠如するそれに、
 仏陀は涅槃を得てから、
 「有る」というか「無い」という、
 思索はまさしく合理とはならない。 14

「虚空に絵の色形を考えるような、この分別は有るのではない。」という御考察である。

章の著述を説く > [誤って捉えたことによる過失を示す]

それ故に、そのように如来は本性が寂滅しており、本性が無く一切の戲論（主客二元的に発生したもの）より超越しているにも拘らず、まさしく劣った心によって恒常と無常等一恒常と無常や、有と無や、空と不空や、一切智と一切不智等であると分別することや、

戲論を超えて、
 無尽である仏陀について戲論を為す、
 戲論によって衰えた全ての者が、
 如来を見るとはならない。 15

戲論（主客二元的に発生したもの）とは、事物の因を持つものであるが、無事物である如来に諸々の戲論が当たると、何処でなろうか。それ故に、如来は戲論より超越したのである。生の無い本性であるので他の本性へ変わり行かない故に、尽きることは無い。その誤った分別がそれ自体で考察した汚れによって心を汚したことによって、正しくない妄分別の様々な特性で如来仏陀世尊をそのような様相に概念化する者達にとっては、自らの戲論によって衰えることになったので、如来の円満な功德は、隠されたものに留まることになるだろう。それ故に、亡骸に似た彼らがこの善説に如来を見ることにはならない。生まれながらの盲目者にとっての太陽の如くである。

まさしくそれ故に世尊が、

「私を色形であると見る者、私を音声として知る者は、誤った捨に入り込んだのであり、それらの者は私を見ない。諸仏は法性を視る。導引者方は法身である。法性は知られる対象ではなく、それは尽く知ることができない。」

と説かれた。

章の著述を説く > [その正理を他にも適用する]

それ故に、この「如来を考察する」において有情の世間が考察されたのである。「この有情の世間は斯様に本性が無いように、器の世間も本性が無いのである」と応用させる為に、

如来の本性であるもの、
それはこの衆生の本性である。
如来は、本性が無い。
この衆生の本性は無い。 16

と説かれ、衆生は如何様に本性が無いものであるかは、「縁を考察する」等によって示した。

如来が本性として有ることを否定する > [了義の教証と合わせる]

まさしくそれ故に、経典より

「常に生の無い法（現象）とはその如く去る。諸法の全ても善逝に似る。様相を捉える幼い心を持つ者達は、世間において無い法（現象）を使用する。無漏の如来の、善法の映像の如くである。ここにその如くその信仰が去ることは無い。一切の世間が映像を見ている。」

と説かれた。

般若母よりも、

「それからそれらの天子達が、尊者長老須菩提へこう言った。

『聖須菩提よ。それらの有情は幻のようであるが、幻ではないのか？』
と言うと、長老須菩提がそれらの天子達へ言った。

『天子達よ。それらの有情は幻のようである。天子達よ。それらの有情は夢のようであり、天子達よ。そのようであれば、幻とそれらの有情は、二つ（別）として無く、二つとされることは無い。そのようであれば、夢とそれらの有情は二つ（別）として無く、二つとされることは無い。天子達よ。一切法（現象）も、幻の如く、夢の如くである。預流¹⁴も幻の如く、夢の如くである。預流果¹⁵も幻の如く、夢の如くである。その如く、一來¹⁶と、一來果¹⁷と、不還¹⁸と、不還果¹⁹と、阿羅漢²⁰も幻の如く、

14 預流^{よる}：小乗の修行者である声聞の第一の果を得た者。

15 預流果^{よるか}：預流の得た果。第 20 章脚注 13 参照。

16 一來^{いちらい}：小乗の修行者である声聞の第二の果を得た者。

17 一來果^{いちらいか}：一來の得た果。第 20 章脚注 14 参照。

18 不還^{ふげん}：小乗の修行者である声聞の第三の果を得た者。

夢の如くである。阿羅漢果²¹も幻の如く、夢の如くである。独覚も幻の如く、夢の如くである。独覚そのものも幻の如く、夢の如くである。円満成就した仏陀も幻の如く、夢の如くである。円満成就した仏陀そのものも幻の如く、夢の如くである。』

それからそれらの天子達が尊者長老須菩提へこう言った。

『聖須菩提よ。円満成就した仏陀も幻の如く、夢の如くである、と言うのか？円満成就した仏陀そのものも幻の如く、夢の如くである、と言うのか？』

須菩提が言った。

『天子達よ。涅槃も幻の如く、夢の如くであると言うならば、他の法（現象）は言うまでも無い。』

天子達が言った。

『聖須菩提よ。涅槃も幻の如く、夢の如くであると言うのか？』

須菩提が言った。『天子達よ。私は仮に、涅槃よりも遥かに優れた何か他の法（現象）が有ろうとも、それも我は幻の如く、夢の如くであると言う。そのようであれば、これらの夢と涅槃は二つ（別）として無く、二つとされることは無い。』

と説かれた。

如来が本性として有ることを否定する > [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「如来を考察する」と言う第二十二章の解説である。

DECHEN 訳

19 不還果：不還の得た果。第 20 章脚注 15 参照。

20 阿羅漢：小乗の修行者である声聞の第四の果を得た者。

21 阿羅漢果：阿羅漢の得た果。第 20 章脚注 16 参照。